

道南太平洋海域スケトウダラニュース

平成 28 年度 第 2 号 2016 年 11 月 30 日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

平成 28 年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（2 次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」および釧路水試「北辰丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2016 年 11 月 17～22 日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深 100～600mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、ほぼ前年同期と同程度。
- ・ 魚群反応の強い海域は登別～苫小牧沖。
- ・ 反応の比較的強い水深は渡島海域で水深 400m前後、胆振・日高海域で水深 350～400m。
- ・ 水温は渡島沖および胆振沖ともに水深 100～300mにかけて平年よりも高い。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも胆振沖の 172、175 海区（登別～苫小牧沖）に強い反応がありました。また、渡島沖の 192 海区にも比較的強い反応がみられました（図 1・2）。
2. 海域（渡島～胆振海域）平均の反応量は、前年度とほぼ同程度となっていました（図 3）。ただし、前年度は苫小牧～鶴川沖にかけて今年度を上回る濃密な反応がみられたものの、恵山～登別沖にかけての反応は薄かったのに対し、今年度は昨年度ほど濃密な反応がみられた海域はなかったものの、恵山～登別沖にかけては昨年度を上回る反応がみられました。
3. 魚群反応は、主に水深 300m以深に観察されました。特に渡島海域では水深 400m 前後に、胆振・日高海域では水深 350～400mに海底に張り付いた反応がみられました（図 2・4）。なお、前年度も魚群反応はその前の年よりも深かったのですが、今年度はさらに 50m 程度魚群の分布は深くなっていました（前年度の魚群の分布深度は水深 300～350m）。
4. 今年度は時化等の影響により、調査期間内にトロール調査は実施できませんでした。そのため、11 月前半に行った刺し網漁獲物調査で得られた体長（尾叉長）組成をお知らせします。これによると、刺し網漁獲物の体長範囲はおおよそ 40～50cm、主体は 45cm 前後となっていました（図 5）。
5. 調査海域の水温は、水深 100～300m付近にかけて平年（2002～2015 年度のこの調査における平均値）よりも高くなっており、渡島沖（南茅部沖）で 1～3℃、胆振沖（登別沖）では 2～5℃も平年を上回っていました（図 6）。なお、スケトウダラの産卵適水温は 2～5℃と推定されており、5℃以下の水温は平年よりも 50m 以上深くなっていることから、この影響で魚群の分布が深いものと推察されます。

なお、次回の調査は年明け後の 1 月中旬（2017 年 1 月 12～20 日）を予定しています。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

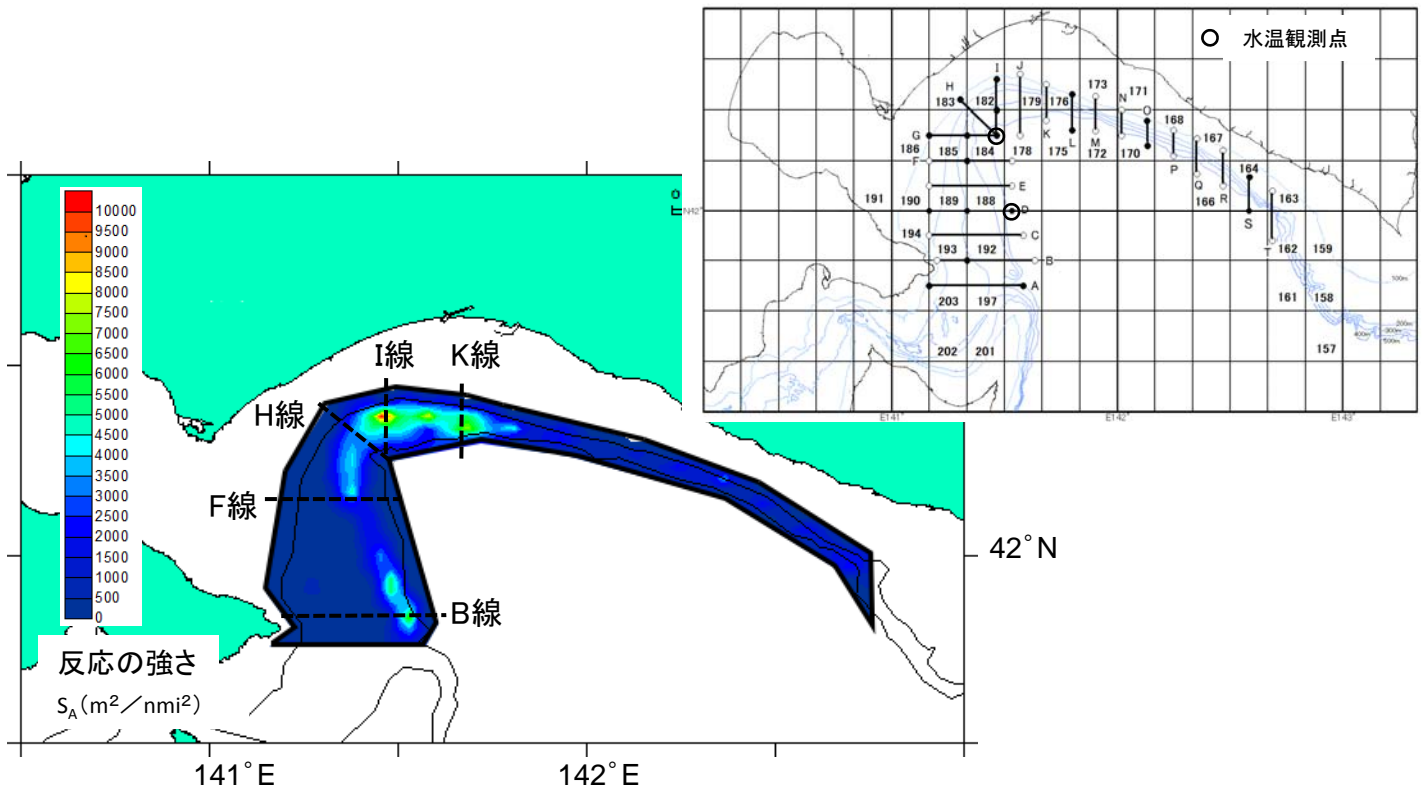


図1 調査海域における魚群の分布(右上図は調査海域図)

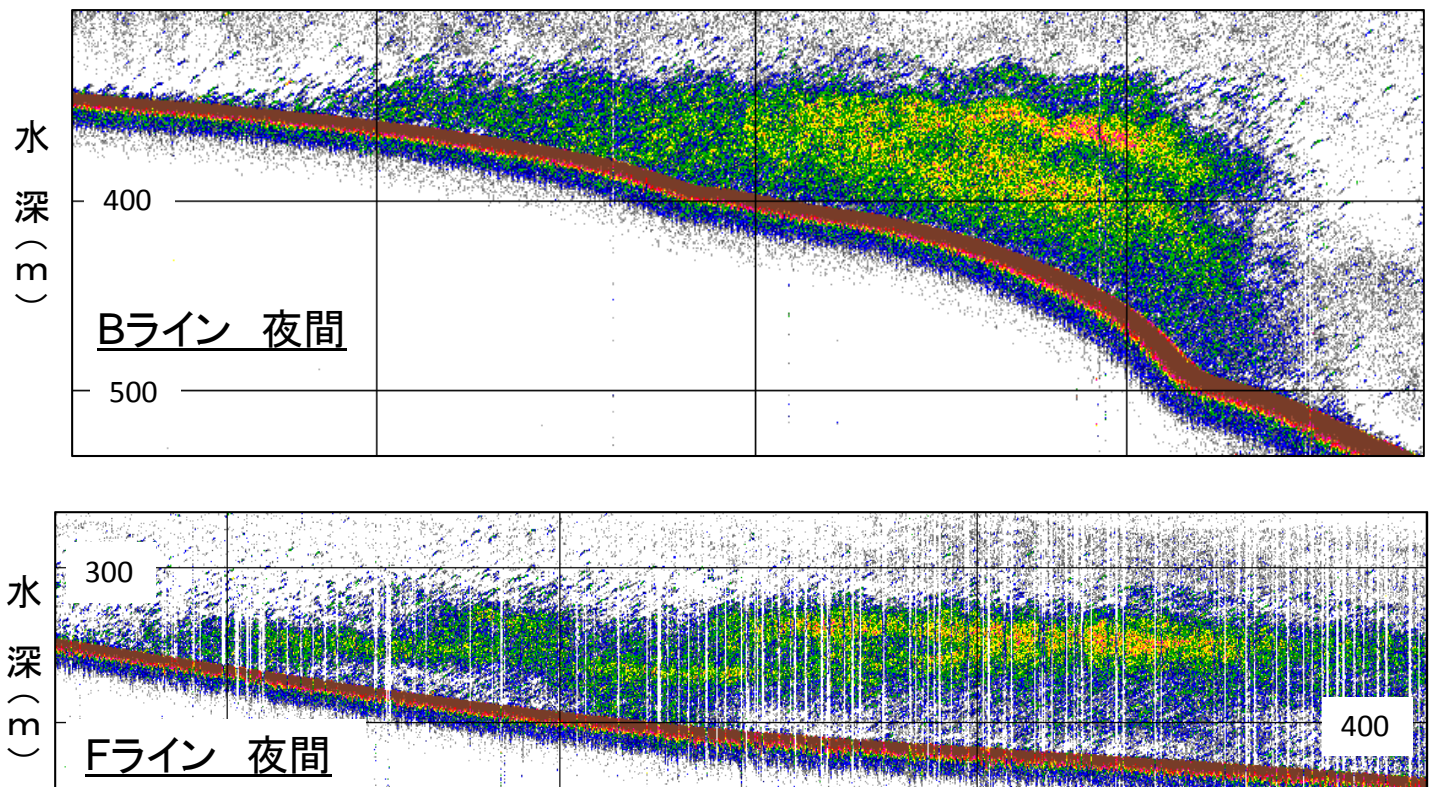


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

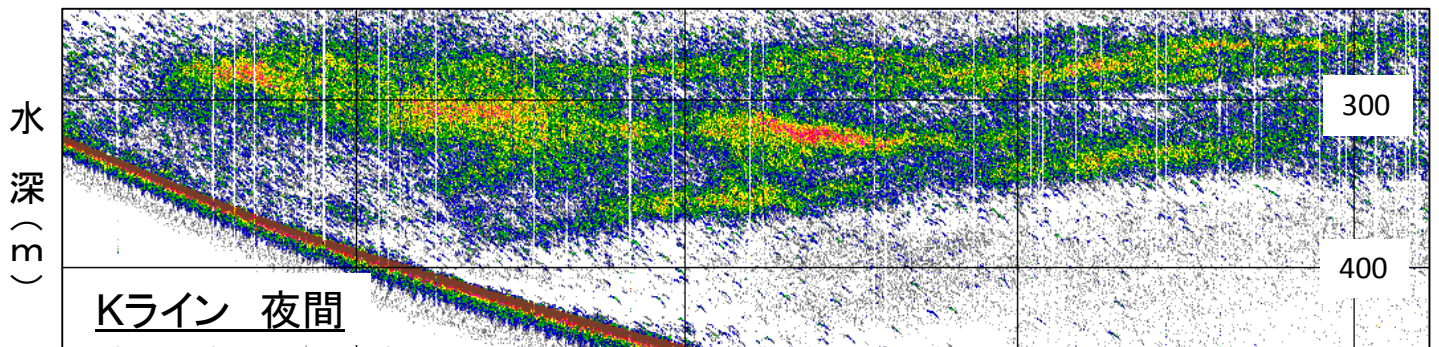
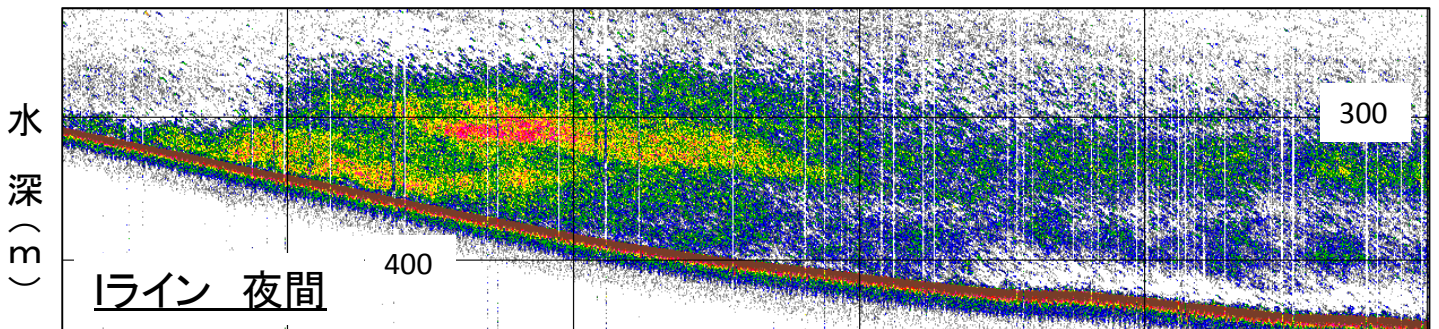
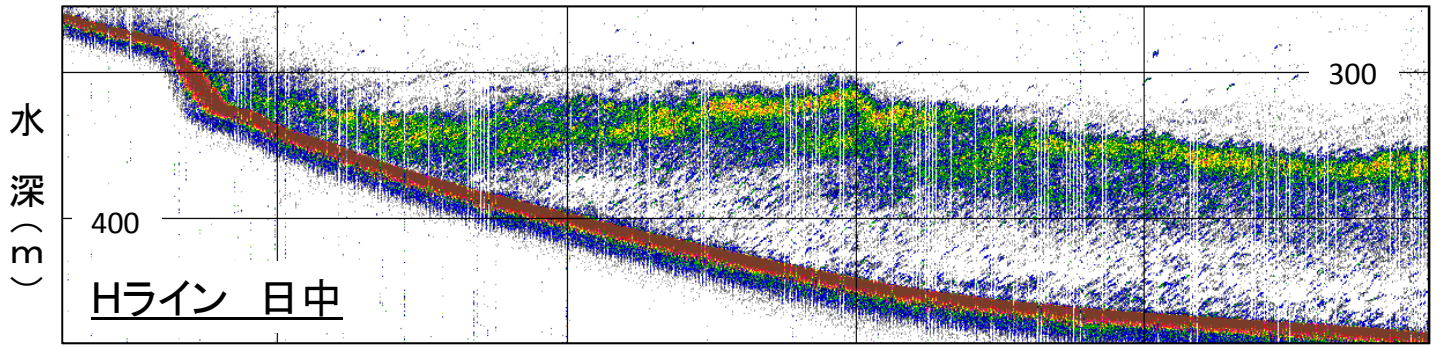


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき
グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

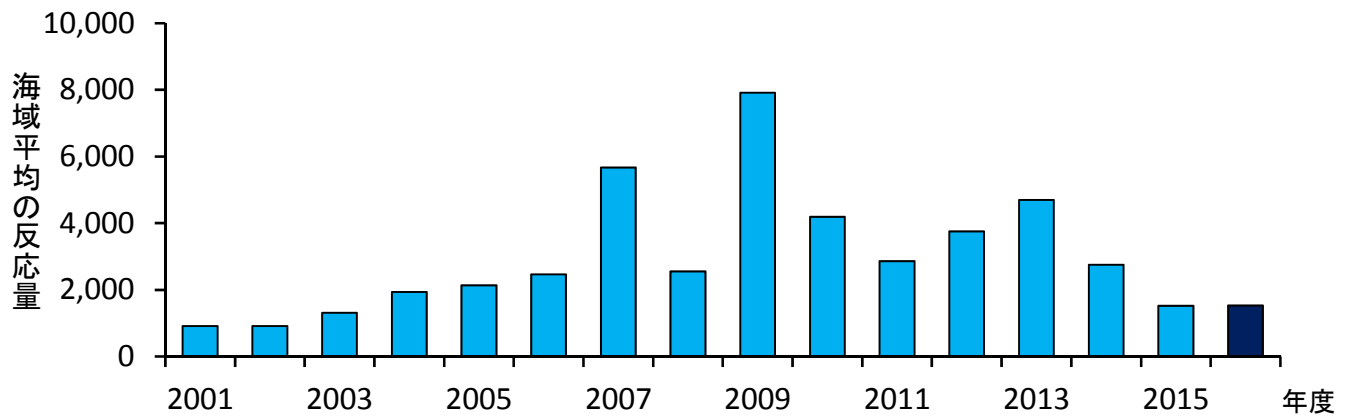


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

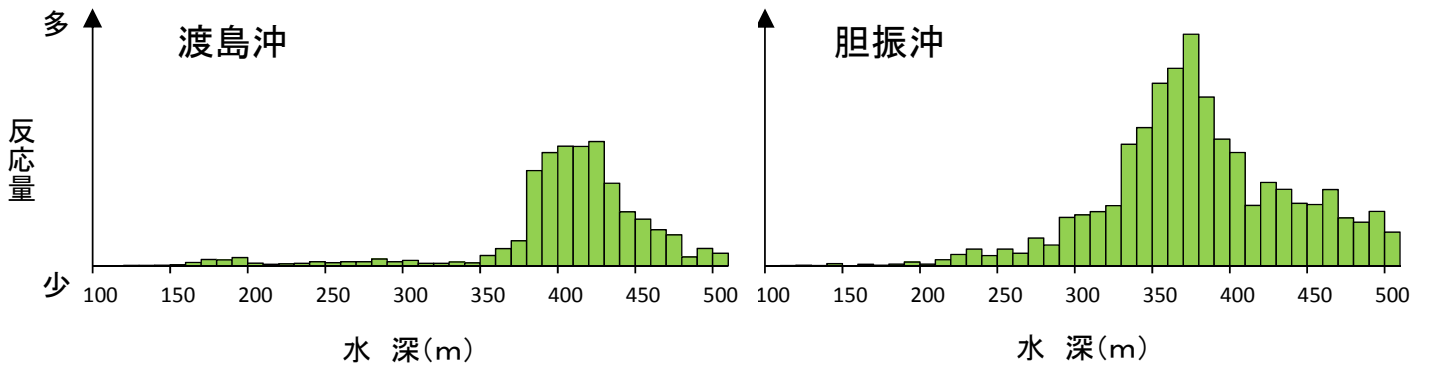


図4 水深別の平均魚探反応量 左:渡島沖(A~Fライン), 右:胆振・日高沖(G~Tライン)

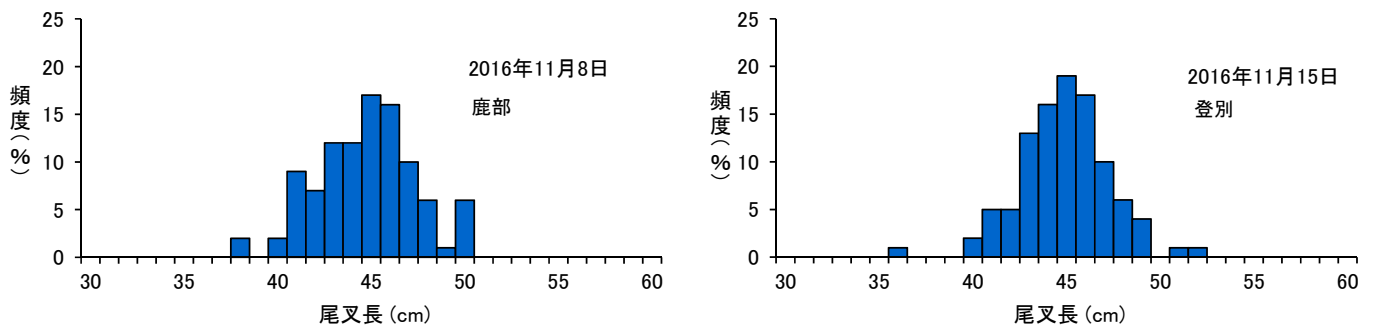


図5 刺し網漁獲物の体長組成 左:鹿部港水揚げ漁獲物, 右:登別港水揚げ漁獲物

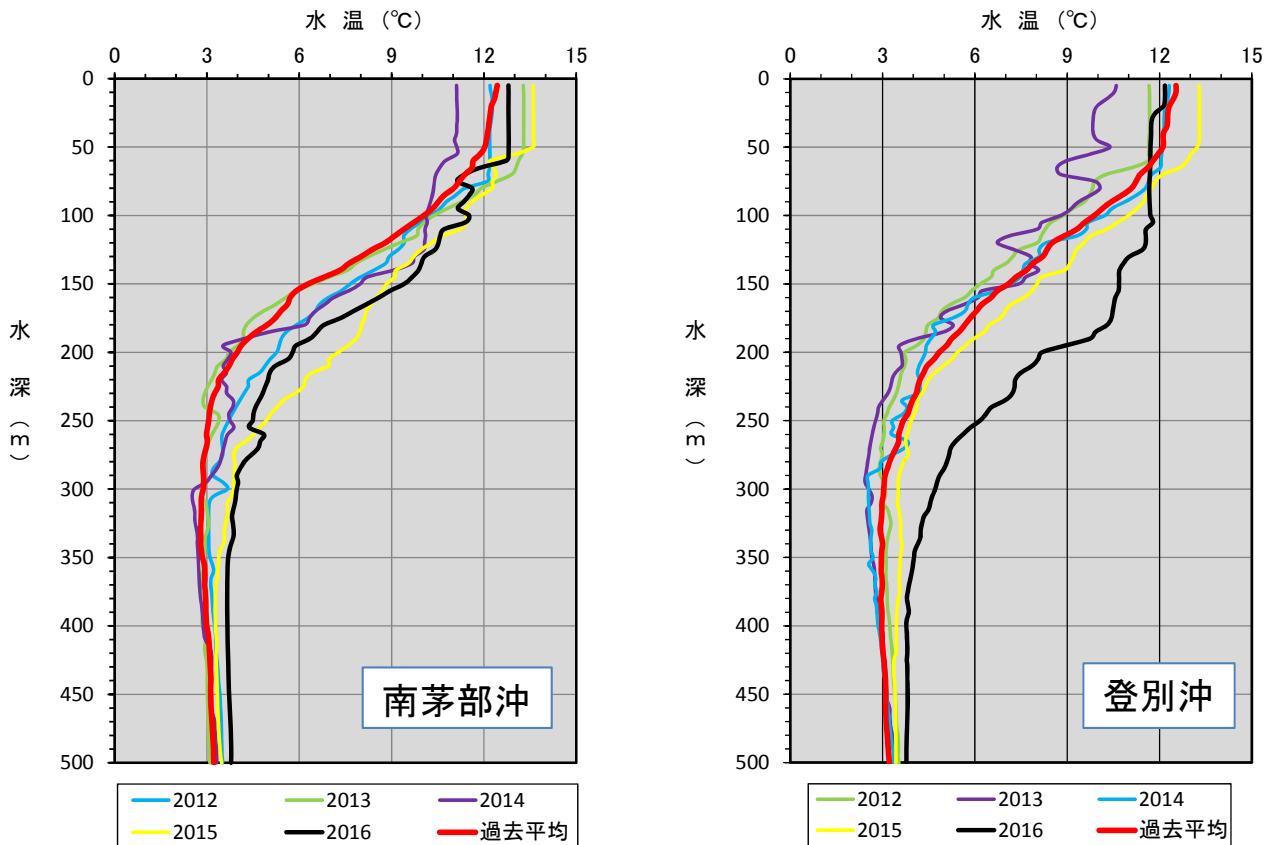


図6 11月中旬における水温の鉛直分布 左:南茅部沖(N42°ライン上), 右:登別沖(Hライン上)
(過去平均:本調査における2002~2015年度のそれぞれの調査点の平均値)